失くした傷名(きずな)を探す旅

雨音 流歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失くした傷名（きずな）を探す旅

【Ｎコード】
Ｎ７６０４Ｗ

【作者名】
雨音　流歌

【あらすじ】
少女は旅に出た。
朧気に霞んだ記憶を頼りに、遺されたひとひらの『想い』を知るために。
知ることができたなら。もう、二度と失くさない。

01　旅に出よう、朝焼けを連れて（前書き）

目の前に広がる空の端が、少しずつ明るんできた。
少女は空を見上げる。夜明けが近付くの藍色の中、星が揺蕩(たゆた)っている。

出発(あれ)から、もう「2日目の朝か…。」
いや、大して時間経っていないのは解っているけれども。というか出発、昨日のことだし。

だけど、何だか無性に我が家を思い出す。一瞬、ちょっと後ろを振り向きたい衝動に駆られ――――我に返って、2、3度首を振る。

そうだ、ダメだよ。ちゃんと自分で決めたんだ。

少女はまっすぐ前を見据える。

ほら、陽が昇ってきた。

一日が、旅が始まる。

01　旅に出よう、朝焼けを連れて

2日前のことだ。確か…、昼休み。

「――――それではこれより、特殊能力実技試験を行います。速やかに大広間に移動して下さい。」

らしくもない、中途半端に厳かな声音で若い女性教師が告げた。その途端、ワイワイ賑わっていた室内は一瞬にして黙りこくってしまった。ちょっと見回してみると、緊張に押し潰され幾分か顔色が悪くなった少年少女がちらほら見受けられる。

まぁ、当然か。今日は大切な日なのだから。それも、今まさに幕が開けようとしているのだから。

「緊張するな」と言う方が無理な話だ。

「…まぁ、私は特に何も思わんけど。」

誰ともなく呟き、教師のつり目がちな瞳の切っ先が向く前に机に突っ伏す。

待つこと6秒。再び実技試験内容の説明を始めた女性教師の声を適当に聞き流しながら窓の外を眺める。

穏やかで暖かいこの季節の代名詞とも言うべき、薄紅の花が一番最初に映った。私はあの花が好きだ。淡く、儚げで、だけどどこか揺るぎない強さを感じさせる。さすが、私と同じ言葉（おと）の響きを持つだけはある。

そんなことをあれこれ考えている内に、

「――――ら…。緋夕　咲良っ！」
「はいいい～ッ！！」

教師の声に勢いよく顔を上げると同時に、クラスメート全員分の不可思議そうな瞳に気付いた。しまった、油断してた……。「考え事なんて珍しいな。だけど、実技試験終えてからにしようね。」
「…スミマセン」
爆笑を必死に圧し殺すクラスメートを一瞥し、反対側の方向にある黒板を見ながら低く呟く。黒板には『焼却魔法』とか『風刃魔法』とか言う文字。…あぁ、この手の魔法か。丁度良い、そこの癇に障りまくりな皆様にひとつ、お見舞いして差し上げましょうか、とかなんとか物騒な事を頭の片隅で考えながら咲良はクラスメートの列の真ん中辺りに割り込んだ。そして、女性教師が「全員居ますね～？」と言ってから数秒後。連なりは大広間に向けてゆっくりと進み始めた。

移動している間に、さっきから女性教師が言っている『実技試験』と、何故それを行うのかを説明しよう。

ここ、魔導能力育成院――――要するに魔法学校では、学生達が日頃どのくらい自己の能力開花に努めているか確めるため、年に一度、今日のような魔法実技試験が行われる。
攻入・防御・治癒・呪術・剣技・そして自らの使え魔との合力など、ジャンルは様々だ。ちなみに咲良が得意とするのは攻入と剣技。この２つに関しては、この紅茜村で随一の実力を誇る（自称）。
反対に防御と呪術とは、あまり得意ではない。生来の短気かつ大雑把な性格は、繊細かつ揺るぎない精神力を要するそれらとはなかなか相容れないようだ。決して授業中に爆睡をかましてた訳ではない。

…話を戻そう。今年の試験は攻入。咲良の得意分野だ。当然、受かる気しかしない。逸(はや)る心は容易くは静められず、昨晩は寝られなかった。更に、ここからが重点(ポイント)。この試験に見事合格出来れば、定期的に学校に報告を出すという条件で合格者の中から3、4人ほどが学校から選出される。そして、普段は絶対に外されることのない、紅茜村と外の世界を隔てる門が放たれる。外の様子を知って見聞を広められるとなれば誰もが少し不安ながらも心浮き立つ事だろう。だが同時に、少しでも不穏があれば自らの力で自らを防護する他ない。自律心を養うには持って来いだ。堅苦しい規制から離脱し、自らの肌で色々と知りたいと願う咲良に、合格を狙わない理由はない。

…さて、話している間に大広間に着いたようだ。そこにはピッチングマシーンに似た形状の機器が置かれている。説明事項によれば、『敵方の攻撃を模した衝撃球(ボール)がピッチングマシーンのように飛んでくるので、止むまで火や風の技を使って自分で焼き切るなり断ち切るなりしろ』とのこと。

大広間(ここ)に来るまでの間微かな声で心情を吐露し合っていた少女達の声が、今、完全に掻き消えた。

「ぇ〜先ほど教室でも話した通り、今からテストです。学生番号順に、ここに記したラインの所に立って…」

女性教師は冷たい石の床を、プリントを持った左手で軽く指し示し、そして左足を少し横に伸ばして爪先で2度、床をつつく。

すると石の床に、淡い白銀に輝く線がすぅ…っと出現した。気だるそうに欠伸をしている1人を除き、それ以外の生徒たちは1人残らず感嘆の息を呑む。

女性教師は一人一人の顔を見回し、ほぼ全員分の瞳が返ってきたのを確かめるとようやく中途半端に厳かな空気を和らげた。一人目の男子の名を呼ぶ。彼は一瞬、ビクッと肩を震わせると、見るからに緊張しまくった様子で進み出てきた。電池切れ寸前のロボットか、と突っ込みたくなるくらいにガチガチだ。そこまで緊張しなくても…。

非情だとは知りつつも、コレにはその場の全員から苦笑が零れた。

そしてテストは始まった。

――以上が、これまでの経緯だ。こうして語っていることから解るように、咲良は見事試験を突破し、今は村外れの小高い丘陵から朝の光を臨んでいる。ふと視線を下げると、咲良の傍らに座る山犬の白い毛並みは真新しい陽光（ひかり）を映していた。見るからに育ちの良い犬が黄金（こがね）に染まる様は、やっぱり

『美しい眺めだな』

突然、現在１３歳の咲良より少し大人っぽい少年の声がした。勿論、男子など周りには居ない。だが咲良は至って普通に「そうだね…本当に綺麗」目は朝焼けを映しながら山犬の頭を撫でる。そう、声の主はこの山犬だ。

『俺はあまり撫で回されるのは好きではない。』そう言いながらも山犬は飼い慣らされた子犬みたいな愛らしい声で啼いた。この場にいなければこの啼き声と、１３歳の少女に付き従う凛々しい面持ちの一匹の山犬とを結び付けるのは、到底不可能だろう。

『…ん～…うるさ…ぃ…。ぁと明る…ぃ…。』

山犬より幾らか幼い、ふわふわした声が聞こえた。何だか眠そうだ。

「え？」
『サクラ、背負い袋の口が開いている。閉めておいてやれ。』
「マジで」
そこら辺にあった岩陰に濃紺のリュックを置き、少しだけ開けて
「悪かった。寝て良いよ」
『ぅん…。ねるから早くしめてよ～…』
夢と現実の狭間を行き来している声音で応えたのは、細身な13歳女子が背負うリュックにも充分収まってしまうくらい小さなフクロウだ。ちょっと不機嫌そうなので指先で頭を撫で、素早くリュックの蓋を閉める。一瞬、半開きの瞳が、夜が忘れていった一対の半月のように黄色く光った。
咲良はリュックを背負うと「さて、最初は……どうしよう。」
そういえば目的とか何も決めてなかった。まぁ気の赴くままっていうのも悪くないけど。旅の初っぱなから軽率な行動は流石にまずいだろう。

「ぅ～ん…どうしようか榮？」
『何故、俺に聞く…。』山犬―――榮はふさふさした長い尻尾で器用に頭を押さえる。その格好で暫く考えた後、
『そうだな…。一先ずは颯季村に寄ってはどうだ？あの村の者は穏和で万人に友好的と聞く。北北東に向かえば昼前には着くだろうさ』
頬、瞳、毛並みの一筋までも撫でてゆく風に鼻先をひくつかせながら榮は言う。

「…じゃあ、そうしよっかな。よ～し早速行くぞ～」
『待て、咲良。いきなり走り出しては危ない』

冷静で的確な指摘も全く聞いていない。

『…仕方無いな。』
昔から、咲良(あいつ)が聞かず屋なのは、もう解りたくないというほど解っている。一度決めたら、自分1人でどこまでも突き進む。とにかく我(が)が強い奴だ。

…強くなければならなかったんだよな。

榮は足を止め、憂いを帯びた瞳の中に咲良の姿をしっかりと映す。
髪を結わえている白地に桜模様の髪飾りや、身を包む（先程のアクシデントに因(よ)ってややくすんだ）紅衣(ワンピース)や、濃紺のリュック。そして、（ワンピースの中に隠れてるけど）咲良が最も愛着を持っていつも身に付けてる、夕陽色の石(ストーン)がついたロケット。

それら全ては、『あの日』咲良へ遺された想い。
榮はやるせない気持ちになった。咲良に『あの日』の記憶は殆どない。まぁ自分みたいに鮮明に憶えているのも辛いだけだろう。榮は無言で小石の混じった砂地を掻く。

《テ…ル、良…ぃ…よ。私たち…は》
《きっと…咲(サク)良に…と…ッて…も…。忘…た方…が…》

『あの日』。そう言って枯れた声で笑って、最期に一筋の涙を頬にすべらせた、何かを…咲良の記憶に遺(のこ)ることを諦めたような目をしてた、両親(ふたり)が忘れられない。

だから――…今年の実技試験日が発表された、その日の夜――――……

『…咲良。』
「ん、何？」

あまりに真っ直ぐな瞳に、俺の内に沈めていた罪悪感が疼いた。
それを振り切るように目を瞑り、凛とした声にすり替えて
『――今年の実技試験とやらはお前の得意な攻入。必ずや合格しろ』
咲良はキョトンとした表情の後、いきなり拳を振り降ろしてきた。
全く酷い奴だ。

「何かな、榮クン？私が攻入で受からないとでも？」
物凄く怖い笑顔だったので弁解と謝罪、応援をすぐに伝えた。――
――そして、有言実行で咲良は合格、今こうして旅路についてる。

――――無くした傷（もの）を探す旅に。

恐らく、傷（それ）を手にした瞬間に咲良はひどく打ちのめされる事となるだろう。
その時に俺は、咲良を支えられる？俺は……

「――――榮、早くっ！置いてくよ～？」

榮がふと視線を戻すと、咲良は既に３００メートルくらい行ってしまっていた。しかもニヤニヤしてる。

『咲良…さてはまだ見ぬ颯季村への行路（みち）を悟ったか。それは素晴ら

しい。付き添いなど不要だな。では俺は帰る。』
「すみませんごめんなさい、案内お願いします榮様」
『…なに、笑っている』

ジロリ、と榮は咲良を見上げる。無邪気な笑顔を数秒間瞳に焼き付けた後、
『…早く行くぞ。』

1人と1（正確には2）匹は颯季村へ向けて歩き出した。

02　風の村

太陽が登りきった空はこれ以上無いくらいの美しい蒼。鳥達は朝食をすませると颯爽と空へ舞い上がり、互いに挨拶を交わし仲良く遊び始める。すごく楽しそう。

今度は周りを見る。強かな生命力を感じさせる樹々や黄色い花畑が芳しく目にも鮮やか。その周りでは、栗鼠や兎、小鹿などが無邪気に駆け回っている。少し向こうを流れる清流からは水鳥の鳴き声。

ここは颯季村。自然と共生する、平穏で美しい村。

「今日も天気良いなぁ…」少女はググ〜っと伸びをして蒼空を仰ぐ。少し色素の薄い、オレンジに近い茶髪を撫でてくれる風の手が心地いい。見るからに人の良さそうな微笑みを浮かべる少女は、ふと、こちらへ向かってくる鷹に気付いた。

「ん？どうしたんだろ…」腕を胸の前に出すと、鷹は腕に止まって『千恵。さっき、こっちに向かって少し汚れた赤い衣に濃い青の背負い袋って姿の女の人…女の子？…まぁ良いか。人が白い大きな犬と一緒に歩いてたよ。ちょっと疲れてたみたいだ。』

「そっか。もうすぐ来そう？」

『ん〜…展望塔から姿は見えたけど、今すぐって訳でも無さそう。』鷹は威厳のある容貌に似つかず、ボーイッシュな女の子らしい、ハキハキした口調で答える。

「よし、解った。とりあえず休息場を開錠しておこう。君は、その子達の所に行って先導して。燈羽」

『了解。』

千恵が腕を上げると燈羽は飛翔(はばた)いて中空を二度旋回し、颯季村と外を繋ぐ樹林(はやし)へ吸い込まれていった。

「……ここ、どこ？」

鬱蒼とした雑木林のド真ん中で呟く咲良。その髪や服はボサボサ&ボロボロで、何かの爆発にでも巻き込まれたのかと思うほど。

『恐らく、颯季村への路(みち)の途だと思うのだが……。』

冷静に述べる榮(テル)の毛並みも幾分か薄汚れ、鼻先には桜の花びらが付着している。　…と、不意に榮がくしゃみして、花びらは落ちてしまった。

「ぁ～もったいない。可愛かったのに。」

割と本気で言うと、榮は拗ねたようにそっぽをむいてしまった。

「ゴメンってば。そう怒らないでよ」

そう言って頭を撫でるが、榮は無反応を決め込んでいるらしく微動だにしない。ちょっと、やり過ぎたかも。まぁ噛み付かれるよりはマシだろう。

「榮～マジ反省してるよ～？謝ってやるからさぁ～」何とか機嫌を直させようと、若干上から目線の謝罪を吐くこと1分。

何かが空(くう)を斬って近付いてきてるのに気付いた。弾かれたように上

を向くと、普通のよりやや赤みがかった鷹が現れてグルグルと旋回し始めた。

「わ、鷲(わし)っ？！…へ～カッコイイ～。初めて見た。ほらおいで～。」
腕を差し出すと、鷹は腕に止まり翼を閉じた。
『さ、咲良それは鷲ではなく鷹だ』
何故か滅茶苦茶早口で言って、榮は近くにあった大木の根本にある茂みへ猛ダッシュ。客観的に見れば榮の方が図体がデカイのだが、苦手なのだ。幼い頃、追っ掛けられたり拐(さら)われかけた、最高に苦い記憶がある。

「鷹？鷲じゃないの？何が違うの？」
『た、体長だ。大型のが鷲だよ』
若干、震えの混じった声ながら説明する。よほどのトラウマらしい。
ちょっと、可哀想かも。
咲良は苦笑いして
「ちょっと待っててね」
鷹を近くの枝に移すと榮の元に寄ってゆき、膝を折って視線を合わせ、頭を撫でった。

しばらくそうしてやってる内に榮も落ち着いてきたらしく、鷹を視界に入れないようにしているものの瞳にはいつも通りの凛とした光が戻ってきた。そろそろ平気だろう。
咲良は安堵のため息をつくと暇潰しに身繕いをしていた鷹の元に寄っていき、
「ごめん、待たせたね。…あなたはどこの子かな？」
『颯季村から村長(むらおさ)のご息女の命(めい)により、参上致しました。燈羽と申します。』
燈羽は意思の強い眼光で真っ直ぐ咲良を見据えながら、透明度の高い声で名乗る。

「そうなんだ。…ぁ、私達、その颯季村って所に行きたいんだけど…」
『お任せを。』
言うと、燈羽は翼を3、4度ほど飛翔(はばた)かせて中空に戻った。そして咲良達はその羽音に導かれ、ついに颯季村へ到着した。

「ようこそ、颯季村へ。旅して疲れるでしょ？一杯食べてっ」
目の前で優しく微笑む少女がそう言った傍から、山菜や果実をふんだんに使った主菜や副菜、スープや和え物、デザートがテーブルに運ばれてくる。明らかに少女1人分じゃない量だ。
「え、え～と…。湯殿(シャワー)もお借りしたし、なんか悪いような気が」
「気にしないで？お客様は精一杯おもてなしするのが、この村の絶対的規則なんだから。」
少女が言うと、部屋の隅で掃除していた使用人や今は出入口付近の止まり木の上で静観している、咲良達をここまで案内してくれたあの鷹までもが首を縦に振った。
「ぁ…はい。」
「あと、その口調気になるな～。あなた私と同い年くらいでしょ？ぁ、私は珠(たまき)　千恵。弥生の月生まれの13歳だよ。颯季村、村長(むらおさ)の娘です」
「ぁ、えと私は緋夕　咲良13歳です…。師走の月生まれで、紅茜村から学校イベントの一環で来まし……た？」
「え、紅茜村！」
千恵は元々おっきな目を更に見開く。長い睫毛が目力を更に引き上げてて、正直ちょっと怖い。

「え、えと…」
「紅茜村って空模様が凄く綺麗なんだってね～。あと学校あるって、ホント良いなぁ。」
千恵は恍惚とした様子で青く清い空を仰ぐ。

そうかな、と呟くと、「山が近くて天気変わりやすいし…。学校ないから、颯季村って。」
ちょっと切なげに微笑みながら呟く。時間の流れが緩やかで人々も温和。日々、幼馴染みの家が開いている修業場や学校で魔力強化に追われてる咲良からすれば、少しくらい天気が崩れやすくたって颯季村の方が羨ましいが、千恵も同じなのだろうか…。

「じゃあ一緒に行こうよ？私も誰か居てくれた方が心強いしさ。榮じゃちょっと、頼りなイテっ」
『おぉ、すまぬ咲良。「偶然」当たってしまったようだな。「偶然」だ』
千恵にじゃれつきながらブンブン振っていた尻尾を体に巻き付けて言う榮。

殴ってやりたい…。いや、でも動物虐待疑惑が…
本心と理性の間で生来短気な咲良の心は約3分間揺れていた。

———そんな咲良達を、遥か上空で薄い笑みを穿きながら眺める人影がひとり。それは咲良や千恵と変わらないくらいの少女だった。
灯り無き夜空色の髪が風に揺れる。その身を委ねるは、陰のような黒に塗り潰された大きな鳥。

「ぁ、居た居た。――――『久し振り』、咲良ちゃん」

口の端を引き上げ、歌うように呟く。

一瞬、春の暖かさを鋭く冷たい風が斬り裂き――……風が止んで暖かさが舞い戻ってきた時、そこに少女の姿は無かった。

０３　黒き縁（えにし）の再会

「おねーちゃん、あそんで～」
声と共に男の子女の子が入り乱れて、千恵の家で彼女と共に私室に居た咲良の腕やリュックに抱き付いてくる。無邪気な勢いに若干押されるが、なんとか踏ん張った。

「ぇ、え～と…。その…」
「わぁっ♪おねーちゃんのワンちゃんもフワフワ～」
咲良に抱き付けなかった子供達も榮に抱き付いている。抱き付かれてる榮は、迷惑そうではあるが半ば諦めているようで、最早されるがままだ。

「ご、ごめんね咲良ちゃん…」
咲良の腕にぶら下がろうとするヤンチャそのものの子供達を頻りに見ながら苦笑する千恵。

「あぁ…良いよ良いよ。子供は別に嫌いじゃないし」
腰に抱き付いてる女の子の頭を撫でながら言う。

「なら良いんだけど…」
「はいはい、そう深刻にならないっ」
軽やかに笑って言い、ふと思い付いて

「そういえばこの村って、何か困ってることとかない？学校イベントの課題で『訪問した先々の村で、何か１つでもその村の役に立ってこい』的なのがあってさ～。やっぱり『学校を創りたい』とか？」
咲良が問うと、千恵は「ん～…それもあるけど…。」
そう呟きながら立ち上がり、「皆、ちょっとあっちで遊んでおいで。

」子供達を外へ送り出し、そっとカーテンを閉めた。ポゥ…と窓枠が淡いオレンジに光り、結界が張られたことを示す。何か特別な悩みなのだろうか。

首を傾げつつ千恵を見ると、

「最近ね…、深闇（みやみ）の里の人達がここら辺にやって来るようになったんだ。まだ何か問題が起きてる訳じゃないけど…。１０年前の『あの日』からそんなこと、今まで無かったのにさ」

「１０年前…？」

憶えている筈のない記憶を辿る。と、

「…っ」

窓を閉めている筈なのに突如、一際強い風が吹き込んだ。瞼越しに冷たい風の感触が伝う。

……やがて風は止み、ゆっくり眼を開ける。

――その時。

「…っ…？」

辺りを見回す咲良。

「咲良ちゃん、どうかした？」

千恵は咲良の顔を覗き込む。咲良は掠れた声で

「今…。」

「ん？」咲良は数秒間、戸惑った瞳で千恵を見つめ返し、「ううん…なん、で…も…」

まだ、何か探すように周りを見回しながら呟く。

聞こえたのだ。歌うように可愛らしくも、雪と共に舞う風のような冷たい声で――――……

「――――忘れちゃったの？」

聞き間違えじゃない。そう確信したのは、遥か上空を見上げた瞬間だ。全身を黒で塗り潰したかのような輩が、颯季村へ射かけようとしているのが見えた。

「榮！！陽翔（はると）もホラ、起きて！早く！！！」

リュックを引っくり返して地図や短剣、魔導書と共に落ちてきた、未だに少し寝惚け眼（まなこ）のフクロウを掴んで榮の背に放る。なんだかちょっと扱いが酷い気もするが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

大きな山犬が駆ける振動を靴の裏に微かに感じながら、大急ぎで魔導書を読み漁る。撃退あるいは守備魔法って何ページだったっけ。くそう…、ちゃんと授業受けときゃ良かった。大体、おじーちゃん先生が午後の第一授業から眠たくなりそうな声で授業するから……（以下略）など、脳内にて完全なる責任転嫁を繰り広げながら、ただひたすら厚い本をめくっていく。

が、なかなか本命のページに辿り着かない。まぁ一番始めのページにある各単元欄でも見れば一発なのだが、完全に頭が真っ白になってる咲良がそれを思い付くことは無かった。

地道な作業すること２０秒。イライラが八割を超えた、その時ようやくそのページが開いた。顔を上げると同時に、敵襲に気付いた村

人のざわめきや警備役人の警告放送が流れる。
数多の人が行き交う、その先頭部には榮達の姿があった。風刃魔法や焼却魔法で応戦しているみたいだが、所詮は動物だ。正式な魔導士、しかも大人数に敵う訳がない。
遠目からでも榮の、その清らかな白い体に次々と赤い線が増えていくのが解った。
「――――千恵。ちょっと、行ってくる。」
「え、咲良ちゃ…」
「絶対この家から出ちゃダメだよ。」
強い眼光と共に告げ、薄紅色の短刀を握り締める。皆のこと、守るんだ。
その決意だけが強く体に焼き付いてゆく。
守るんだ。てか守らなくちゃダメだ。

――――もう、二度と失くさないように――――……

「――――へぇ、何か失ったものがあるんだ？知ってるけどねっ」
走りながら視線を上げると、ざわめく木々の中、少女が笑ってた。夜色の長めの髪で、顔はよく見えないが、不意に視線が合った。気がした。
――――刹那、樹上（そこ）に在った筈の姿が消えた。

「な…っ」
「遅いっ♪」
後ろから耳元で囁かれる。何か、温度の無い得体の知れないモノが背中を滑ってゆく感じがした。
「ッうっ……さ…！！」
振り向きざまに短刀を煌めかせる。だが、それよりももっと早く、榮の口から凄まじい紅炎（ほのお）が放たれた。
「な…っ」
少女を中心に、地獄を思わせるような業火が渦を巻き、うねり、時に火花が弾ける。まるで火炎の龍のようだ。この炎は榮の感情（こころ）そのもの。自制心というものが幾らかは備わっている人間と違って、動物は純真で直向き（ひたむ）。それはパートナーとしてはとても心強いが、時として凶悪な刃となる。
「て、…榮っ！！」
咲良は焼け始めている土をちらりと見下ろしながら懸命に呼び掛ける。が、聞こえていない。声ではなく音だと捉えられているようだった。
その時。
「榮…」
千恵が、いつもは赤茶色の瞳を烈火の色に変えて低く唸る榮の傍に寄り添い、その首に静かに腕を回した。
「千…っ」
「大丈夫だよ」
榮か、それとも止めようとした咲良にか。穏やかに笑い返す。

『チエ…離せ……、離せぇッ！！』
小刀や鏃(やじり)よりも格段に鋭い爪が、そこらで咲き群れる菜の花のような色をした衣の腕部分を切り裂く。だが、
「――――榮。怒りたいのは解るよ。だけど、榮のやろうとしてる方法は咲良ちゃんを傷付ける。だから、ダメ。」
優しく語り掛ける千恵。
榮は千恵を振り切ろうと首を左右に振り、牙を突き立てようと口を開いた。黄色い衣の腕部分に、少し血が交じった歯形が付く、

「――――榮、ダメだ！！」

無意識に咲良は叫んでいた。ピクッ、と榮の体が小さく跳ねる。そして

「て、榮…！」
「大丈夫よ咲良ちゃん。」

榮の上体は崩れ、抱き止めた千恵の腕の中で実際よりもずっと幼い子犬のように寝息を立て始めた。

04　次なる地へ

「――――え～ダメなの？そんなぁ～。良いじゃん行こうよ～。」

榮を夢世界から引き戻すかの如く風の囁きと共に聞こえたのは、襖(ふすま)の奥で彼のパートナーが子供みたいに駄々をこねる声だった。

「えっと…ご、ごめんね…？」「ねぇ行こうよ～？」

声だけで解る、ふんわりとした雰囲気を持つ少女が申し訳なさそうに返す。パートナーよりも何倍も大人な対応だ。思わずため息を吐いてしまった。なんで俺のパートナーは、こんな風に聞かず屋なのか…。まぁある日突然、あいつが聞き分け良くなっても不気味だけど。

そう思いながら体を起こすと同時に襖が開かれ、「あ、榮やっと起きたか。心配した～てか具合は～？」

例の如く、バスケットに大量に詰め込まれた焼き菓子を頬張りながら咲良が言う。本当に心配してんのかお前。榮はそういう類いの意味を込めてジトっとした目を投げ掛ける。

「へる、ほわいんだへど。らいひょうぶ、ひゃんとひんぱいひてたってば。」

『何言ってるか解らん。ちゃんと飲み込んでから発言しろ。』

端的かつ的確に言って、毛繕いを始める。因みに、咲良が「榮、怖いんだけど。大丈夫、ちゃんと心配してたってば」と言ったことくらいは解っている。その言葉が割と本音だったことも。咲良(かのじょ)は冗談は言っても嘘は絶対に付かないことも、知っている。何だか照れ臭くなって、少し桃色がかった頬を隠そうと、尻尾で頭を撫で付けるような仕草をする。そうしながら努めて平静な声音で『そういえば先程…。我儘(イヤイヤ)期真っ盛りの幼女の様な声が聞こえていたな。どうし

たんだ？』
「誰が幼女だっ！…千恵、『次期村長としての仕事とかあるから旅にはついて来れない』って…。」
『至極妥当な理由だ。』
あっさりと受け入れる榮を、咲良は少々不満げに頬を膨らませながら見やる。確かに、千恵も色々と忙しいのは解る。だけど、せっかく友達になれたんだから少しくらい一緒に…。とか、咲良が考えてたことを悟ったらしく、千恵は微笑んで
「また、颯季村（ここ）においでよ。待ってるから。あと今日は泊まりなよ♪」
そう言って手を差し出す。

少しの間の後、咲良は微かに笑ってその手を握った。

「颯季村（ここ）の近くで、その地域内がある程度整備されてる村とか町とか、どこら辺にあるかな？武具とか食糧調達したいんだよなぁ～」
千恵が明け渡してくれた一室を惜し気もなく占領し、床に寝そべりながら馬鹿でかい地図を広げる咲良。あまりの大胆さに、思わず呆れを通り越して尊敬の念すら抱いてしまいそうだ。むしろ抱かずに居られようか。榮は脳裏に渦巻く諸々の感情を顔には出さず、代わりに『そんなもの、売り物に頼らずとも増幅魔法があるだろう。一昨年の秋頃に講習を受けているぞ。…まさか休んだのか…いや、お前はずっと皆勤だな。だとしたら怠慢以外の何物でもないな―――』
直後、笑顔の咲良が手にする魔導書から数多の鷹が飛び出してきた。冷静になれば所詮まやかし物と解るのだが、榮は素晴らしい瞬発力と必死の形相で逃げている。

『咲良～榮おにーちゃんどうしたの？オバケでもいたの？』
今朝や先程の戦闘時と比べて幾分か元気になった声で陽翔が尋ねて

くる。榮にしてみればオバケなんか可愛いくらいかもね…。柔らかな羽を持つ、くりっとした黄色い瞳が何とも可愛らしいフクロウを抱き締めながら、やや意地の悪い笑みを浮かべる。「…咲良ちゃん止めてあげなよ、可哀想だよ」

食後の菓子(デザート)を運んできた千恵が穏やかに諭す。咲良は振り向き、「あぁハイハイゴメン。……お、それはっ♪」

途端にテンションが上がり、無意識にパチンと手を打つ。千恵の手の中には、丸っこい桜餅が6つほど詰められた、深緑色の容器が納められていた。上から覗くとまるで容器の中に大輪の桜が花開いているように見える。

「うん。天雲(あまう)のヤツだよ。あそこのお菓子って本当に美味しいからね」

「解る解る〜。…そういえば、その天雲町って、どこら辺にあるんだっけ。近い？遠い？」

咲良は不安げな面持ちで訊いてみる。遠かったら嫌だな…寝る間も惜しんで歩くなんて、面倒臭い上に危険すぎる。いくら向こう見ずで猪突猛進型な咲良にも、小指の先ほどは危機感というものがあった。

「ん〜比較的近いんじゃないかな？徒歩でも一時間弱で行けるよ。ただ、颯季(ここ)村より少し標高が上がるからね〜。山道な上に更に天気悪くなりやすくて、危ないんだよ」

『あと、行く人々の金品や命までも奪おうとする…危険な奴らもよく出るんだ。』

止まり木から千恵の腕に移った燈羽が、忌々しそうに瞳を歪める。千恵もその言葉に静かに頷く。ふと、その瞳の奥に掻き消えぬ黒い傷痕(シミ)を見た気がした。

「千――…」
「ぁ、私お風呂入ってくるね。そのお菓子は好きなだけ食べちゃってッ」

飛びっきりの笑顔でその続きを弾き飛ばすと、千恵は就寝着（パジャマ）を抱え足早に部屋を出ていった。

足音を細く空いたままの扉を見つめる咲良。少し色素の薄い髪に月明かりが宿り、淡い紅色に染まっていた。

その夜みた夢の中。幾千、幾億の花びらが散りゆく中にたったひとり、咲良は居た。
はっと息を呑むほど美しい光景。なのに、頬には一筋の雫が伝ってた。

その時、誰かが笑った。
頬に触れる、温かい手。別の誰かが名を呼んだ。
『咲良、笑って』って。

…誰？
よく見ようと、目を凝らす。

―――その時、今までの穏やかな美しさが嘘みたいな冷たい風が吹いた。花びらは幻想的なまでに鮮やかで凄まじい波を打って辺りを渦巻き――――次の瞬間、その場所よりもっと深い闇夜（ところ）に沈められた。

『――…ら、咲良っ』
「……っ」
静かに目を開けると、木の天井が朝の白い光を纏い、朧気に霞んで見えた。少し間があって、榮が顔を覗かせる。身体を起こしてベッドから出ようと掛け布団を捲ってみると、そこには身体を丸めて爆睡している陽翔が。下敷きにしなくて良かった。
ため息をつくと同時に栄が擦り寄ってきた。
「お早う、榮。…どうした？」
そっと頭を撫でてやる。栄は咲良を見上げる。そのまま、しばらくの沈黙が流れた。

『……』
「…て、榮？」
強く真っ直ぐな瞳に射竦められ、微笑みが苦笑いになってしまう。
『…いや、何でもない』
「……？なんだよ榮～気になるじゃん。言いなよ～」
『ちょ、抱ッ付くな苦し…ッ！』

「――咲良ちゃん、榮、陽翔くん～？起きたの……」
部屋に入ってきた千恵が見たのは、いたずらっぽい満面の笑顔を弾けさせる少女と、その腕の中で生気が吸い取られてしまったが如く項垂れる山犬の姿だった。

「――よし、そろそろ行こうか。途中まで送っていくね」「うん、ありがとう」
頷くと同時に、今まで外で動物達と遊んでいた子供達が弾かれたよ

うに顔を上げた。みるみる、その瞳が揺れ始め、
「さくら～いかないで～」
「もっとあそぼう～」
「おねえちゃんもワンちゃんも行っちゃヤダよぉ～」
そう言うと懸命に駆けてきて咲良や榮の前に横一列に並び、泣きそうな瞳を咲良に向けた。

「え～と…」
参ったなぁ…泣かれるのは苦手なんだよ。咲良は助けを求めるように榮を見下ろし、次に千恵を見た。

視線に気付き、千恵は苦笑いを返して首を傾げた。数秒後、膝を折り子供達と目線を合わせると1人ずつ頭を撫でながら
「こら、咲良お姉ちゃんを困らせないの。私から『また来てね』って伝えたから。大丈夫、会えるよ」

「本当に～…？」
「うん。絶対だよ。ね？」
「ぇ、あ、も勿論っ」
少し声が上擦ったが、肯定の意思を示すと子供達の表情が和らいだ。

「ねぇ、おねえちゃん」
まだ4、5歳くらいの幼い女の子が手を握ってきた。膝を折ると、学生証くらいの大きさの黄緑色の紙が何枚か束になっているものを差し出してきた。
「ぁ、ありがとう。これは？」
「あのね、お山のむこうにある、あまうまちって所で今日のよる、春花(しゅんか)まつりがあるよ。わたしの分けてあげるから、おねえちゃんもいってみてね。おだんごおいしいよ」
「…うん、ありがとう。行ってみるよ」

女の子の頭を撫でて笑いかける。

「――――咲良ちゃん、時間だよ～。燈羽」

「ぁ、はいッ」

『了解』

咲良が振り向いた瞬間、燈羽が幾分か巨大化した。

「わぁ…ッ」

「ぁ、ごめん。びっくりした？燈羽（このこ）、身体の大きさ変えられるんだ」

『そうそう♪…千恵ってば訓練の時、すっごくスパルタだったんだよ～。もう、死ぬ気で頑張ったよ～。』

「あはは～それは大変だったねぇ」『本当だよ』

「こら燈羽、咲良ちゃん…っ」

飛びっきりの明るい笑い声を風に託し、一羽の大きな鷹が、淡い花の香りを纏う大空（そら）を斬るように翔び出していった。

05。

上空から見下ろすと、眼下には緑(あお)や紅色に繁る木々や陽の光をちらばせながら流れる緩流など、一枚の画(え)の如く壮大な風景が広がっていた。

「綺麗…」

思わず零れた声に、千恵が顔を綻ばせて頷いた。だが、『…確かに景色良くて好きだけど、この先は…』

『あぁ…。』

「ん？どうしたのお二方。ほら見てみなよ～凄い綺麗だよ～？」

朗らかな笑みを溢す咲良を見て、榮はぎこちなく微笑み返す。そして一瞬後にはどこか緊張した瞳に戻った。

「…？」

首を傾げて千恵の方を見る。

「ねぇ、千恵…」

『着いたよ。』

刹那、身体がフワリと浮いた。…と思った瞬間。ガクッという重みを感じ、「…何かイキナリ急降…ってイ゛ヤァぁあ～～！！」

限りある貴重な資源を三本くらい無駄に破壊して、咲良達は無事に（？）着地した。

「…っ！痛ぇ…おい燈羽！貴女(てめぇ)…何しやが」

咲良がとても女性とは思えぬ口調で怒鳴ろうとした、その時。

「――今、なんか女の声しなかったか？」

「あぁ…その前には何か…木が根こそぎ倒れたみてぇな暴音が…」

「ヤバ…ッ」

千恵は今にも燈羽に飛び掛かりそうな勢いの咲良の首の後ろを掴むと、目についた岩陰に飛び退いた。凶賊らがやってきて、ちょっと後ろを振り向かれたら…と思うとヒヤヒヤするが、道のド真ん中に居るよりマシだ。

燈羽が素早く標準的な大きさに戻って真っ先に岩陰に身を潜め、千恵、榮が続く。咲良も入ろうとした、その時だ。

「あ…っ」

岩で擦れてしまったのか、ロケットのチェーンが切れて落ちてしまった。物心ついた時から片時も忘れず身に付けていた、咲良にとって命に値するほど大切な御守りが。

「最悪…っ」

慌てて取りに行こうとする。が、

「咲良ちゃんダメだよ！」

「取りに行かなきゃいけないの！！邪魔しないで！！」

制止しようとする千恵をなんとか振り切ろうとする咲良。そうしている間にも歩(あゆみ)は確実に近付いていた。

不意に榮の鼻先がひくっと動いた。瞳が一層険しくなり、触れれば切り裂かれそうだ。

その瞳に疑問を持つよりも先に、呟いた。

『何だろう…？血濡れた匂いがする…』

『凶賊か』

「凶賊…っ？」

何気無く呟いた榮の言葉が引き金だったかの様に、千恵が掠れた声を漏らした。咲良の腕を押さえる手の力が抜け、目を見開いている。

「…千恵？」
『千恵、しっかりするんだ。ねぇ、千恵！！』
燈羽が必死に呼び掛けるが、その瞳は虚ろだった。
「燈羽…。」
『…かつて、颯季村は凶賊の襲撃を受けたことがある。千恵は、数多なる人死にを目の前で見てしまったんだ。』
そこまで言うと燈羽は自らの翼から羽根を一枚取り、千恵にかざした。淡い黄色の光が線香花火のように弾ける。…光が消えた時、千恵はキョトンとした面持ちで辺りを見回していた。
「…良かった」
「へ…咲良ちゃん？」
長い睫毛を瞬かせる千恵。どうやら燈羽の秘力（ちから）には催眠効果もあるらしかった。まぁ、一安心かな。口許が自然と弛む。

「――――おやァ？首領（リーダー）、ありゃ何でしょう？」
声がすぐ近くで聞こえた。凶賊達がすぐそこに居るのだろう。2人と2匹は一斉に手の甲で口を押さえる。

お願い、早く何処かに行ってよ…！目を凝らし、必死に心の中で怒鳴り続ける。

「…おぉう？ありゃ、本物の金と紅石で作られてるじゃないか！！売り飛ばせば、かなりの額になるぞ！！！でかしたぞ！」
耳障りな嗄（しわが）れ声が豪快な笑い声をあげる。
「！！」
その途端、足音の間隔が急激に速まった。岩影から見える範囲に仰々しい装いの影が差し込む。
数秒後、薄汚れた手が伸ばされた。
――――させない、それだけは。

「薄汚い手でそれに触んな、この荒くれクソジジイ共！！！」
もはや品位の欠片も見当たらない台詞を吐き捨て、咲良は岩陰から躍り出ると同時に攻入魔法を発動させた。ロケットが夕陽色に光り、燃え盛る火の龍（ドラゴン）が現れ凶賊らに業火を放つ！！

「うわぁ、な、何だこのガキ！？」
口ではそう言うものの、その表情を見る限り動揺と畏怖の念を抱いているのは明らかだった。

それほどまでに、咲良に秘められた力は強大なものなのだ。更に言えばこんなモノはまだまだ手慣らし程度。…だが、今は力の使い方がまずい。強固たる意志在っての力ではなく、感情がそのまま力として具現化しているだけだ。やがてその力に自ら飲まれる、と言うことは過去幾度もあった。

――『あの日』の人々のように。

「や、やべぇ行くぞ！！」
凶賊が逃げ去って行く。咲良は無表情の視線を流し、ゆっくりと方向を換える。

まずい。これはもしや…。榮の脳裏に暗い靄（もや）が掛かった。

咲良が目を閉じた。榮の内（なか）に立ち込める靄が黒みを帯びてゆく。

――――そして目を見開いた時、咲良の眼は万物を焼き尽くす業火の紅色に変わっていた。

『咲良やめろ…！！』

「――――ぁ、凶賊さん方やっと見付けた～。すみませんけど茶葉と天雲粉を返して下さ～い。」

何ともゆる～い純・脱力＆癒し系な声が頭上から聞こえた。

一同が空を見上げると、某有名な物語で主人公の猿が乗っていそうな雲に、１人の少女が和むオーラ垂れ流しの微笑を湛えて座っている。

「ヘンっ、悪ィがコレは俺達が頂いたんだ。お前らはガキみたく泥団子でも作っときゃ良いんだよ。」

凶賊の一味が気味の悪い笑みを浮かべて言い放つと、周りの者も再び野太い笑い声をあげる。

「そうですか～なら仕方ない。…ぁ、そこの貴女方、ちょっとそこの岩陰にでも避難した方が良いですよ～。」

言いながら、雲の中に手を突っ込んで何やらゴソゴソと探っている。

「よいしょ…と」

少女が取り出したのは、何本かの金の棒だった。すると今までロケットに集中していた凶賊の眼が棒へと向いた。金目の物を貪る、何とも醜くく厭らしい眼光が宿っている。

「…なぁ、お嬢ちゃん。このロケットとその棒、交換しないかい？勿論茶葉や団子の粉も返してやるよ…。」

耳にするだけで半ば恐怖すら覚える、不気味な猫なで声で問い掛け

る凶賊共。対する少女は、「良いよ～。」
という軽い返事をするや否や、金の棒を落とした。
「なんかやけに素直な…まぁ良い、これは大金だ！！さっきの薄汚れた首飾りなんてモンは比じゃ無――――」
この上なく上機嫌な凶賊がそう叫んだ。その時、２つの出来事が同時に起きた。
１つは、素晴らしく澄み渡った青い空に浮かぶただ１つの雲から雷鳴と閃光が放たれ、天高く突き上げられた数本の金の棒に落ちたこと。もう１つは、黒焦げになった凶賊の一味の手からロケットが跳ね、持ち主の足元に転がったことだ。

山道を共に行きながらほのぼのオーラ垂れ流し少女の話を聞いた。
彼女は蒼葉（そうば）　綾菜（あやな）といって、天雲町の住人らしい。『２時間ほど前、今夜催される春花祭りの準備に追われていた所にあの凶賊らが現れ、祭り事用の特別な茶葉や団子の粉が強奪された、それで追っていた』と。
「…そうなんだ。とりあえず取り返せて良かったね」
例え、その手段（やりかた）がどうであれ。黒焦げと化した凶賊（バカ）共の姿を思い出しつつ言う咲良。…正直に言おう。アレには笑ってしまった。
「はい～。ぁ、そうだ良かったらお二方と犬さん、鷹さんもお茶して行きませんか～？」
綾菜が和やかな笑みで問い掛けてくる。そういえば、喉が渇いてるし少し小腹が空いてきたかも。断る理由はなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7604w/

失くした傷名(きずな)を探す旅

2011年10月12日08時05分発行